

東京湾再生のためのつながりの発見！

江戸前勉強会

No.	Room #	何を	誰が	困難	知恵・方法
1	1	うなぎで環境再生	自治体（行政）	市民関心の低下、特別採捕許可	江戸前うなぎシンポ、江戸前うなぎ一斉調査
2	1	生物一斉調査	専門家（博物館など）		
3	2	目指すべき東京湾の姿の描写		目標が定まらない	
4	2	合流式の問題解決・分流式の検討	役所	費用	合流式のままパイプラインもあり？
5	2	上流と沿岸の関係構築			
6	3	情報の共有	持つ人、わかる人、地方公共団体（環境部局、研究所）、国	地域による情報の偏り、養老川、底質のヘドロ、底生生物に高濃度で検出	
7	3	2016年のアサリ減少の継続した結果の共有	研究者	生物調査の結果がまとまっていない、行政のとりまとめやぐがいない（法律や規制に基づいていない）	
8	4	東京湾が抱える新しい課題への取り組み（貧栄養、高水温化、マイクロプラスチック）	一人ひとり		話し合う場、行政と市民だけでなく、漁業者と市民の新しい対話が必要
9	4	生物に表れている変化の認識			話し合う場、行政と市民だけでなく、漁業者と市民の新しい対話が必要
10	5	漁業者のつながり	若者	モチベーション、環境・状況の変化に対する適応、陳情は逆効果も	
11	5	一般の方が漁業者の話聞く場をつくる			
12	5	点在する東京湾関連施設（鳥、歴史施設なども含め）をつないだ情報発信	運営主体の自治体	行政官のつながりが弱い	
13	6	おかずの釣れる釣り施設をつくる	行政	お金がない	
14	6	ヘドロのない海をつくる	企業、個人、民間団体	ヘドロの利活用、廃棄方法、悪臭	ヘドロの知識、利活用価値創出
15	6	海のアミューズメント（TDLのような）創出	大手企業	チームの形成	地域貢献として、民間へのマーケティング
16	6	ヘドロ処理施設としての保護区域創設	行政、企業、研究者	チームの形成、財源の確保	タイでの実例がある
17	7	潮干狩りができる場づくり	みんな、場を管理する人、利用する人、若い人、保育園仲間	活動の制約、アサリが育たない、日常で通えない、入浜権のあり方	駐車場料金のようなシステムで集金、みんなで現場に行く
18	7	行けば遊びが湧いてくるような砂浜	みんな、場を管理する人、利用する人、若い人、保育園仲間	活動の制約、アサリが育たない、日常で通えない	駐車場料金のようなシステムで集金、みんなで現場に行く